

風の末裔シリーズ・4th シーズンの7

～巢落ちの雛鳥～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「この最近のナーガは、あからさまに機嫌が良い。

妙にニコニコ思い出し笑いで、つまづいたシンリィに頭からお茶をかけられても、ルウに蹴り球をぶつけられても、いいっていいって…と、鼻血たらして上の空だったりする。

ナーガ様、夜中に隠れて何か作っていて、どうやら綺麗な石を使った女性用のブローチっぽいんですね、なんてシドとソラが洩らしちゃったもので、執務室コンビは俄然色めき立った。

「おそろく外部の女性だ。里の中では今の所、ナーガに接近している女のことはおらんからな」

腕組みしたホルズが、大机の向こうで鼻息荒く言う。

「何でそんな事、言い切れるんですか?」

「ノスリ家女性陣ネットワークを管轄するんじゃないぞ。里の中の女の情報は、彼女達が完全に把握している」

「……………」

里の中で女の口にチョッカイ出すのは、絶対やめとこう…、西風の青年二人は固く心に誓った。

「下手にカマを掛けても、ナーガは口を割らないだろう。逆意地を張らせて駄目にしてしまう恐れがある」

ノスリがさも重大事項のように重々しく言い、ホルズが皆の真ん中に過去の日程表を広げて、棒で指しながら解説を始めた。

「この何週間か、奴は必ず水曜日に休みを作ってたがっている。

実際、昨日今日と仕事を前倒しにして飛び回っている。水曜の明日に休みを取りたいのが見え見えた。恐らく相手は、毎週決まった曜日に暇が出来る、規則正しい仕事に従事している女性だろう」

「…だから…相手を知って、どうするんってんですか?」
シドとソラは巻き込まれたくない気分満々で、腰を浮かして逃げる機会をつかがっている。

「ナーガ様の事はそっと置いてあげた方がいいと思いますよ。また壊れた時の事、考えろと…」

「だからあ、ソラ! 何でお前さん、始めっから壊れる事を前提とする?」

ホルズが熱い拳を握りしめて立ち上がった。

「我らがナーガは小さい時からモテモテで、女の口に不自由する人生を送るなんて、夢にも思わせなかつたんだぞ」

「まあ…、それは僕達も思いますけれど…」

何を言っても火に油なので、二人は溜め息付いて抵抗するのをやめた。

「お前ら、『あのナーガ』が自力で何とか出来ると思うか? 俺達がちゃんと相手を知って、フォローしてやんなきゃアカンだろうが」

「でも、どうやって相手を知るんです？ ナーガ様に気付かれずに尾行するなんて、僕達には無理ですからね」

外でバタバタと不器用な足音が近付いて来る。

「いるだろうが！ 可愛い可愛いナーガの『コマドリちゃんラックロビン』が」

修練所が終わって駆けて来たシンリィが、御簾を開けてキョロンと覗いた。

「シンリィ、いいかあ。オジサンの言う事を、よおく聞くんだよお」

ホルズが、羽根の子供の小さい肩を両手でガッツリ掴んで、無理矢理長椅子に座らせた。

シンリィは早くいつもの報告書を綴じる作業をやりたくて、大机とホルズを、交互にソワソワ見ている。

「明日はナーガにくっついて行くんだ。お前が可愛くすり寄れば、奴は拒否出来ないからな」

「でも、シンリィが見たって、僕等に伝えられないでしょう？」

「大丈夫だ」
ノスリが奥の物入れから埃だらけの木箱を出して掲げた。

「そこで、このノスリ家の秘宝が役に立つ」
大きな肺活量で埃をフワッと吹くと、部屋中真っ白になった。

直撃を受けたシンリィは、ケホケホ咳き込んでいる。

仰々しい木の箱の紐を解いて出て来たのは、握りこぶし程の、二等身の木彫りの人形だった。飛び出した真ん丸な目…、大きなワシ鼻…、分厚い唇…、頭には角みたいなのまである。お世辞にも可愛いとはいえない。どっちかという和不気味だ。

「な、何なんですか…、これが、秘宝…？」

シドとソラは目をパチパチさせながら不審気に眺めた。

「親父、この人形、本当に大丈夫なのか？ 子供がふざけて作った出来損ないにしか見えないが？」

「ああ、確かにこれだった。カワセミが術を込めた傑作品、『映し身人形』だ！」

ノスリは箱から人形を摘まみ上げて、ホルズに向けた。

「人形の目を見るんだ。正面から、しばらくじっと覗んで」

ホルズはおっかなびつくり人形を覗き込む。ノスリはそれを大机に置き、大きな鏡を正面に立てて唱えた。

「お前と最後に目を合わせた無礼者の名は?!」

「おお!!」

鏡を覗き込んだ一同が叫んだ。小さな人形サイズのホルズが映ったのだ。そのホルズが喋り出した。

《…ホルズ…蒼の妖精、蒼の長のノスリの長子、蒼の里

に住んでいる。妻一人、子供七人、最近近所の未亡人に気が行って、カミさんに袋叩きに……」

ノスリが焦って鏡をバタンと伏せた。

「シンリィ、はは、凄いだろ。お前の親父さんの術だぞ」

ホルズが、今聞いた事を振り落とそうとするように、シンリィの頭をワシワシ撫でた。

「まあ、ざっとこんな感じだ」

「これを持って行って、ナーガが会いに行った相手とにらめっことさせるんだ」

ノスリが、脳を揺すられてクラクラしているシンリィの手を取って、不気味人形を無理矢理握らせた。シンリィは人形を一目見て、口の両端を下げて心底嫌そうな顔をした。

「それにしても、凄い術力(じゅりょく)ですね。正式には何に使う物なんですか」

「昔、俺の取っておきの隠し酒をフィフィに頂かれてるかもしれない……ってボヤいていたら、カワセミが作ってくれたんだ。

酒瓶の上に置いときゃいいって」

「……………」
「ちなみにモデルはフィフィだぞうだ」

「……………」

聞くんじゃなかった……って顔で、シドとソラはもう一度溜め息を付いた。凄い術力の無駄遣い……。

調子つ外れな鼻唄が近付いて来る。

「ただいま戻りましたあ！ あれ？ 皆さんお揃いで？」

噂の主は弾んだ声で御簾をくぐって来た。仕事が済んで一晩寝たらあのヒトに逢える……って喜びが、身体のうちから立ち昇っている。本当に隠して置けないヒトだ……。

「いいかい、シンリィ。『そのヒト』が人形の目を見たら、素早く返して貰って、懐にしまっとくんた。他のヒトに見せるんじゃないぞ。それから『そのヒト』には愛想良く……って、お前には無理か……。取りあえず笑っとけ。お前さんのその片エクボを嫌いになる女性はいない」

朝……、何だか沢山の事をホルズに言われてクラクラしながら、シンリィは馬繋ぎ場のナーガの所へ向かった。

「申し訳ないね。明日は埋め合わせるから」

「構いませんよ。『たまたま』出来た休暇、のんびりして来て下さい」

仕事に出るシドとソラを見送るナーガの脇に、シンリィが歩

いて来てピタリと張りの付いた。

「……? どうした? シンリィ?」

子供はナーガと深縁の馬を交互に見る。

「着いて来たいの? 珍しいな。でも、今日は…、いや、いいか…」

フウリに二胡を習いに行くのは楽しみなんだが、いざ二人きりになると間が持たない。シンリィが適当にチヨコチヨコしていてくれたら話題に出来るし、向こうも気軽くなれるかもしれない。

ナーガはあっさりシンリィを鞍の前に乗せた。ここまではホルズの予定内だ。しかし予定外の事は、いつもいきなり降ってくる。

「シンリィ・ファ!!」

甲高い声が響いて、オレンジの瞳の女の子が、大きな本を抱えて馬の前に立ちはだかった。

「何処へ行く? 今日沙漠の星座の話をしてやろうと思っていたのに!」

「ルウシエル?! 修練所は?」

「今日は、行かない!」

「行かないって、何で? あっ…」

今日は一年目…、すなわちシンリィの学年の子供達が、いよいよ新馬を当てがわれて、飛行訓練に入る日だ。しかし、羽根と身体の均衡が取れず力も弱いシンリィは、まだ時期でないと思われ、一人先伸ばしにされたのだ。

シンリィは分かっているのかもしれないが、いつも通りのほほんとした物だが、そういうのを放って置けないのがルウって子だ。この日は自分も修練所を休んで、シンリィと一緒にいてやるって決めていたんだろう。

「うん、シンリィがナーガと行きたいのなら、私も着いて行けばいいんだ。馬を引いて来る。待っていてくれ」

「えっ…!!」

連れてく当人の了承もハッタクしもあったもんじゃありません。

まあ、下手に断ってハソを曲げられるより、素直に連れて行って口止めを頼んだ方がいいだろう。ルウは意外とそういう約束はキチンと守れる。

とにかく里の者達に…特に執務室コンビに、フウリの事を知られたくない。そんなじゃないのに、また余計に騒ぎ立てられて厄介を生む。

「綺麗な谷だな」

風露の部落の向かいの山に馬を繋いで、ルウシエルは第一声

でそう言った。今日も霧が深く、谷に沈むミルク色の海から塔が二ヨキ二ヨキそそり立って、幻想的な風景だった。

「ありがとう」

山から部落の入り口に掛かる梯子の向こうに、今日の関の番人フウリが、ニッコリ微笑んで立っていた。彼女の番人の曜日に合わせて来たんだから当然だ。

藤色の衣装はいつも同じだが、今日は髪の間位置がいつもより高く、明るい牡丹色の紐が結ばれている。そのささやかなお洒落が自分の為だと嬉しいだけだ。ナーガは心の中で呟いて、すべつべんだ。自惚れてロクな目に遇った事はない。

「あ、ああ…、こんにちは、フウリ。今日は連れも一緒させて下さい。こっちはシンリィ・ファ…甥っ子です。それとルウシエル…遠く西風の里の友人です」

「ルウシエルだ、よろしくー！」

ルウは子供扱いされず友人って紹介されたのが嬉しかったようで、大きな天文学の本を抱えて満足気に梯子を渡った。

「はじめまして、フウリよ。さ、こちらへ…」
フウリは珍しそうにシンリィの羽根を見つめたが、特に話題にはしなかった。

関の小屋の中の小卓に、二胡と譜面が置かれている。

「前回の続き…、三段目から始めましょ」

「なんだ、オッサン、楽器を習いに来たの？ もっと密やかな楽しい事かと思っただ」

ルウが譜面を覗き込んで、こまっしゃくれた事を言う。

「あら、音楽を練習するのは密やかな楽しい事よ。いつか誰かに聞かせてビックリさせる為にね」

ルウ相手だとフウリも口が滑らかになる。

いいぞいいぞ…。

ナーガはフウリと差し向かいで二胡を弾き始め、小屋の外では、ルウとシンリィが寝転がって本を広げた。ルウが星図の頁を開き、一つ一つの星の話を自分の演出を交えながらシンリィに話して聞かせる。小鳥のさえずりみたいなルウの声が遠くに聞こえるからか、今日のフウリは緊張が薄れ、リラックアスしていた。

いいぞいいぞ…。

「お姉ちゃん！ お風ご飯！」

元気な声と共に、フウヤがツタを滑ってやって来た。

風露の部落は塔と塔の間がツタのロープで結ばれている。移動は、そのロープに滑車付きの棒を引っ掛けて、ぶら下がる

滑るのだ。下は落ちたらシャレにならない高さで、ナーガはいつもヒヤヒヤしながら見ているのだが、生まれた時からそれが移動手段のない風露の民には、普通に日常な事だった。

「何だそれ!」

フウリより先に、目を輝かせたルウが駆け寄った。

「ムチャムチャ面白そうじゃないか! 私にもやらせてくれ!」

フウリはビックリして、棒を取られまいとフウリの後ろに回って逃げた。

「あらあら」

ナーガも外に出て来た。

「ルウ、駄目だよ。それは遊びじゃないの」

「遊びじゃなくても、やってみたい!」

「風露の部落の決まりなんだ。外の者がツタを滑るのは駄目なんだよ」

「えー、なんで? ねえ、一回だけ! ねえ!」

駄目だと言われたら余計に燃えるのがルウだ。フウリの棒を引ったくろうと、フウリの周りをグルグル回った。いい加減回ったところで、フウリがルウをヒョイと捕まえた。ルウの目の高さまで屈んで、フウリが持つ木の棒を指して言う。

「ね、この部落には、ルウシエル達が靴を履いて歩く『土の道』



がないの。あるのは、棒を使って滑る『空中の道』。貴方だつて、いきなり、靴を貸して！ って言われたら、ビックリするでしょっ。」

「あ…、ああ」

ルウが神妙な顔で納得した。凄いい！ フウリ！

「すまなかった、えと…。」

「フウヤだよ！」

「そうか、フウヤ。私はルウシエル、ルウでいい」

「…お前は？」

フウヤは興味深そうにシンリィの羽根を見た。

「こいつはシンリィ・ファ。口で喋るのは得意じゃない」

「ふうん、うん、オッケー」

フウヤも、何も聞かずに受け入れた。

様々な部族が訪れる関では、ヒトの『変わった所』に突っ込まないたしなみが染み付いているんだろう。そういう意味では、外に出ない風露の一族だが、非常にグローバルであると言える。

「あのね、外のヒトがツタを滑って向こうに行くのが駄目なの。だって、もしも怖いヒトが来たら、僕達逃げられないじゃん」

皆で風食を囲みながら、フウヤがルウに説明した。子供達は

持って来た焼き菓子を交換したり、もうすっかり打ち解けている。いいなあ…子供って…。

「私は怖くないだろっ。」

「うん、ルウならすぐに怖くないって分かるけど、『見かけに

よらず怖いヒト』っているじゃん。だから、全員駄目って事に

しとくの」

「ああ…、そういえば、西風の里も結界を張って、誰彼なしに

入れなくしてるな」

「そうそう、そんなのと一緒だよ」

「ふうん、なら仕方ないな」

大人が頭ごなしに禁止するより、子供同士に任せただ方が、分かる言葉でちゃんと伝えられるんだなあ…。ナーガは妙に感心しながら聞いていた。

「ねえ、ツタを滑ってみたいなら、山に一ヶ所ツタを張った場

所がある。お姉ちゃん、あそこならいいでしょ」

「イワタケを取りに行く道ね。あそこなら誰が滑っても構わな

いわ」

「こっちだよ、行こう」

フウヤは元気に、ルウとシンリィを伴って、梯子を渡って山道を登って行った。向かいの山でキノコや山菜を取るの、正

式に成人していない子供の仕事だ。山中に、ツタを滑って渡る箇所があるのだろう。

「中斷しちゃいましたね。さっきの所から始めましょつか」

フウリが二胡を持ち直した。

ロクに譜面の読めないナーガは、フウリの指を見て目で覚えているのだ。しかし、論語や経書は幾らでも覚えられるのに、この指の運びが全く頭に入らないのは、何でだろう？

「ナーガ様は音楽を理屈で考えようとしているんです。音を浮かべて指が動くようになれば、何でも弾けますよ」

「遠い道なのです」

「でも最初よりも良い音が出るようになりました。お母上にお聞かせするのが楽しみですね」

「ああ……ハハ……」

老師、そんな事喋っちゃったのか……

お陽様が傾いて、夕方近くなつたが、子供達は戻らなかつた。

「そんなに遠くはないんですが……」

「ルウの事だから何回も何回も滑っているんじゃないかな？」

「いえ、かなりの急な角度だから、往復は出来ない筈です」

「じゃあ、片道は山道を登るの？」

「登って、崖を降りて、イワタケを取って、ツタを滑って帰っ

て来る道なんです」

「……………」

「…なにか…？」

「……険しい所…なんですか？」

「ええ、まあ……」

「まさか、そのツタを滑らないと帰って来られないなんて事は？」

「…ええ、崖の最後は飛び降りるので、引き返す事は出来ません」

フウリもナーガの様子で、何だか行き違いがあった事に気が付き出した。

「でも、風の妖精の方って、落ちても大丈夫だと…。ツバクロ様はいつも、由返りする馬から飛び降りたり…」

「シンリィは、違う…!!」

ナーガは立ち上がった。運動神経ゼロに近いシンリィが、険しい崖のツタ滑りしなきゃならない羽目になっているなんて!!

「え？でも、あの子…、飛べるんでしょう？羽根があるんだから…」

「………!!」

トンでもない勘違いだ。いや、羽根があったら普通そう思うのか？だとしたらフウヤもそう思って油断しているのか？

不安な顔のフウリに気を配る余裕もなく、ナーガは関の小屋を飛び出した。

梯子の所で息せきぎったフウヤと鉢合わせする。

「ナーガさまあ!!」

フウヤ一人だ。背筋に冷や水が流れる。

「シ…、シンリィが、落ちた…!!」

心臓が凍り付いた。

「ルウが崖を降りてる。霧で下が見えないんだ」

「あ、案内して!!」

ナーガは馬の所までまろびながら辿り着いて、フウヤを手招きした。オドオド近寄るフウヤを引っ張り上げて、馬を急発進させる。いつものナーガなら、子供を乗せてそんな飛び方は決してしない。下に固まっているフウリが見えたが、気にしている暇はなかった。

「ルウは、ここを滑るのはシンリィじゃ無理だって」

フウヤは馬のタテガミにしがみ付いて、震える声で言った。

「うん、ルウなら分かってくれたいた筈だ。それで?」

ナーガは早口で冷たい口調だった。今、すべてにおいて余裕をなくしている。

「シンリィを背負って滑ったんだ。腕力には自信があるって」

フウヤは泣き出しそうに喋った。

「そしたら、シンリィの懐から何か転げ出たの。シンリィったら、それを掴もうとして両手離しちゃったんだ」

「…!!」

一体、何を掴もうとしたってんだ?! あいつ…!!

眼下に岩山と、霧の谷に掛かるツタのロープが見えた。

ナーガは馬を空中で止め、印を結んで集中する。

「同じ血で結ばれた者、血に心えよ…!!」

谷中の『気』がナーガに集まる。植物の気、動物、虫の気…。

「…??…?…い・な・い…??」

どんなに神経を凝らしても、蒼の妖精のシンリィの気配はない。どうして…?

ナーガは馬を急降下させた。フウヤは目を開けていらねなくて、ただただ馬にしがみ着いている。ミルク色の霧の海に突入り、目を凝らす。こつこつした崖の表面が見えて来た。

「…!!」

突き出た崖の岩肌に、点々と朱の色が見える。近付くと、数枚の羽根が岩肌に引っ掛かっているだけで、血ではなかった。だからって安心して訳ではない。ここでバウンドして、下に転がり落ちたか? 恐ろしい光景が脳裏を横切って、背筋が凍

った。

だんだん角度が緩やかになる崖をジグザグに飛びながら下へ向かう。視界を遮る濃霧が忌々しい。

どこかで痛い、辛い思いをしているシンリィ！一刻を争う状態かもしれない。一秒でも早く見付けてやらなきゃ！

「ナーガさま……」

懐のフウヤが凍えそうな声で言った。

「ごめん……ごめんなさい……。僕、シンリィが飛べないなんて……」

そこでナーガはやっと我に返って、谷底でフウヤを降ろした。馬に乗った事すらない子供は、ガクガク地面にへたり込む。

「すまない……、ごめん……」

しかしナーガはフウヤに気を配る余裕はなかった。再び馬を上昇させ、風向きを変えながら何度も印を結んだ。だが、血の呼び掛けには、クスリとも反応がない。

「ナーガ様あ……!!」

谷底の岩場に、大勢の人影が現れた。フウリの報せを受けて、風露の部族の若い者達が降りて来ていた。掟だと言っている場合ではないと、ラウ老師が寄越したのだ。

「フウリと何人かは、崖の途中に出る方の道を行っています」

「す、すまない……、有難う……」

「何か、手掛かりは？」

ナーガは首を横に振り、部族の者も顔を曇らせる。長い歴史の中で、誰もツタから落ちなかった訳ではない……。

皆で手分けして谷をくまなく捜したが、羽根の一枚も見付からなかった。塔の根元の工事が先週で終わってしまった事が悔しい。せめて草の馬を持つ蒼の一族がいてくれたら……。

日暮れかけ、若者の一人が遠慮がちにナーガを呼んだ。さっきの崖の延長で、そのまま下の河に落ち込んでいる箇所がある。

「……………」

ナーガはドウドウ流れる濁流を見つめた。後ろに、皆も集まって来る。

「……………ありがとうございます……………」

ナーガは流れを見据えたまま、小さな声で呟いた。

「禁を破ってまで、探してくれて、ありがとうございます……。暗くなると危ない。皆さん、もう、戻って下さい。僕は、下の河を探します。だから、皆さんは、もう……………」

あれだけ呼び掛けても、谷にシンリィの反応はない。河に流されたか、『気配のない存在』になっているかだ……。

ナーガは馬を引き寄せた。誰も何も言えない。

「僕も探すよー！」

叫ぶフウヤの肩を、部落の者が引き戻した。

河に落ちた…ということとは…、もう、見つかっても、冷たい子供を引き上げるしかない…って事だ…。今まで、谷に落ちて、口の聞ける身で戻った者はいない。

「シヨボくれてんなあ!!」

静寂を破る、西風の娘の声がした。皆、一斉に振り向く。

ナーガには、その時のルウシエルは小悪魔でなく、後光輝く聖天使に見えた。オレンシの瞳の娘の背中には、しっかり羽根の子供が背負われていたのだ。

後ろから、フウリと何人かも降りて来る。

「ルウ!! シンリィ!!」

フウヤが駆け寄って、ルウに抱き付いた。

「シンリィ…、シンリィ、大丈夫なの?」

「ちょっと目を回しただけだ。どこも怪我していない。落ちた時、羽根を上げたのが見えただ。それで大分、落ちる早さが弱まった。風に乗って随分離れた所まで落ちてって、追いつくのに時間が掛かったけれど…、よお、おっさん!!」

ルウが喋っている間にナーガは無言で歩いて、真ん前まで来ていた。

「すまなかったな、心配したか? まったくとんだ巣落ちの雛鳥だ。お、シンリィ?」

シンリィがルウの背中から降りて、ナーガを見上げた。

——はし——

乾いた音がして、シンリィが横を向いていた。叩かれた頬に赤みがさしている。

「わ、私だろ、叩かれるとしたら!」

ルウが慌てて割り込んだが、ナーガは膝を折って、ルウごとシンリィをカ一杯抱きしめた。

「痛い! 苦し…い! おい、おっさん…!!」

二人に寄り掛かったまま動かなくなったナーガを、フウリが覗き込んで言った。

「気を、失われています…!」

「情けない奴だ…って思わないでくれ、な!」

草の馬で運ばれ、関の小屋に毛布を敷いて寝かされても、ナーガは目を覚まさなかった。

『あの、』血で血を探す『って術、トンでもなく体力を使つらういんだ」

部落の若者は、まあ良かった良かったと言ってくれて散り、ラウ老師にはフウリが報告して来た。

小屋にいるのはフウリとフウヤ、神妙なシンリィ、ノビてるナーガ、それとさっきから一人で喋っているルウ。

「それに、おっさん、普段はあんな事しない。初めて見た、手をあげるの」

「ええ、分かるわ」

フウリは三人に暖かいココ茶を入れて渡した。

「叩いた手も痛いよ。叩かれたホッパタと同じ位」

「へえ、お姉ちゃん、いつもそんなに痛かったの？ 僕をひっぱたく度」

「フウヤ！ もう寝る時間過ぎてるわよ！ それ飲んだら寝なさいー」

フウヤはちょっと駄々をこねたが、フウリに追いついてられて、不満そうに家路についた。

小屋がシンと落ち着いて、ルウはそっとナーガを覗き込んで、起きる気配がないのを確かめてから話し始めた。

「おっさん、週にいっぺん暇を作るために、めっちゃめっちゃ頑張ってたんだ。すうっと、あんま、寝てない」

「……………」

「可愛いおっさんだろ…」

ナーガの寝顔の横で目を見合わせるルウとフウリの間に、又

ッと不気味な顔が割り込んだ。二人びつくりして尻餅を付いた。不気味な顔はシンリィの持っていた木彫りの人形だった。

「シ、シンリィ？」

「どした？ それを落とすまいとして落っこちたんだろ？」

シンリィは真剣な顔で、フウリの目の前に人形を押し付けるように差し出した。

「何？ 私にくれるの？」

どう見たって可愛くない、目玉の飛び出した二等身人形…。

「あ…ありがと…」

フウリは口の端をヒクヒクさせながら、両手を伸ばした。しかし、フウリが受け取ろうとした人形を、シンリィは離さなかった。

「あっ？」

二人の間で人形は弾んで、落っこちた下にはお約束通りナーガの額があった。

——「ン!!」——

額のコブを濡れ手拭いで冷やししながらナーガが、シユンとしたシンリィを睨む。

「まったく…、皆にどれだけ迷惑かけたと…」

「許してあげて下さい」

人形を両手で持ったフウリが口を挟んだ。

「このお人形、私にくれるつもりだったみたいです。それを落としそうになって慌てたのね」

「……………」

ナーガは大きな溜め息を付いた。まあ、無事だからよかったもの…。

「お茶、入れますね」

フウリは人形をもったまま立ち上がり、釜戸の方へ歩いた。その時丁度霧が流れて、窓からの月明かりがフウリを照らした。

《…私はフウリ…》

いきなり、無表情な声が響いた。ナーガは振り向き、ルウも、えっ？ って顔でフウリを見た。当のフウリも驚愕の表情だ。

《…私は、風露の部落のフウリ。二胡造りのフウリ…》

フウリ本人の口は動いていない。声は別の所から聞こえる。「その胸のブローチだ！」

ルウが指差した。

フウリの胸には滑らかなクリスタルのブローチがあり、その中に小さなフウリが映って、喋っているのだ。

《…私はフウリ。昨日は大事な化粧板を磨ぎ損ねて割ってしまった。火曜日は何だか作業に集中出来ないの…》

ナーガもルウも目を丸くしている。フウリ本人は空の月より蒼白だが、ブローチの中のフウリは屈託なく笑った。

《…水曜日は朝からウキウキしてる！…》

声が途切れた。フウリが人形を取り落とし、胸のブローチを引きちぎっていた。

「ヒドイ…！ こんな…こんな物を…!!」

怒りに身体中震わせて、フウリはそれをナーガに投げ付け、小屋を飛び出した。そのまま全力でツタまで走って、あっという間に闇に滑り入ってしまった。

「おっさん……………」

ルウがブローチを拾った。

「これ、おっさんのプレゼントだったのか？」

「ああ…でも…」

ナーガは茫然自失と凍り付いている。

「そんな、術なんて、掛けていない…。掛ける訳ない…」
「分かってる」

ルウは木彫りの人形を拾い上げた。

「犯人はこっちの人形だ」

「えっ？」

「カワセミ長の術の入った『映し身人形』」

「え？ え？ 何？ それ？」

「昨日、執務室へシンリイ誘いに行って、外で聞いちまったんだ。ノスリ長がおっさんの彼女を探ろうと、シンリイにこれを持たせるのを。聞くつもりはなかったんだけど…」

ルウは泣き出しそうなシンリイを覗き込んだ。

「シンリイはノスリ長に言われた事を律儀に律儀に守ろうとしただけなんだ。ノスリ長もお前の大好きなヒトなんだよなっ」

「そう…か」

ナーガは何だか脱力して、シンリイの頭に手を置いた。

「うん、もう、いいよ、シンリイ。帰ろう…」

「よくないだろ！ フウリの誤解、解かなきゃ」

慌てるルウをナーガは遮った。

「いいんだ。……もういい」

「何が！」

「自分の幸福だけにかまけていて、シンリイの危険に気付いてやれなかった」

「……」

「僕は…そんなに沢山抱え込める程、器用じゃない…」

「バカ野郎お——!!」

ルウのグーパンチが飛んだ。『あのヒト』より背がない分、下から顎に入ってメッチャ痛い。

「女性も子供も、荷物じゃあない！」

呆然と尻餅を着いている蒼の妖精の次期長に、西風の娘はツンカを切った。

「共に肩を並べて歩くモンだ！ そんな風に一人で背負ってる気持ちになられたら、迷惑だ！」

それから戸口に立って、ナーガをビツと指差した。

「私が行く！ 絶対フウリを連れて来るから、そこを動くんじやない！ 分かったな！」

ツタを滑って来る者がいる。風露の民の若者だ。

「どうしたんです？ フウリが来て、番人の交代の時間を早めてくれて…、いったい？」

話の途中でルウが若者の胸ぐらを掴んだ。

「お願いだ!!」

フウリは自室の作業場で、一心に化粧板を磨いていた。

「あんまりだわ…」

あんな物を利用して、ヒトの心を探るヒトだったなんて。

「そりゃ、おっさんのセリフだ」

戸口に、オレンジの瞳の娘が立っていた。フウリが電気で弾かれたみたいに身構える。

「私一人だ。罰があるんなら後で受ける。だから話を聞いてくれないか？」

「だ、駄目よ！ 見なかった事にするから、すぐ戻って！」

ルウは怯むるまず作業場に入って、持って来た人形をギツと睨んでから、作業台にドンと置いた。そして周囲を見回して、ピカピカに磨かれた割れた化粧板を手にとって、人形にかざした。

「……？」

フウリは呆気に取られて黙って眺めている。

《…私はルウシエル…》

いきなり声が響いた。ルウは口をきゅっと閉じている。

《…西風の長の娘、ルウシエル。最近おっさんにカノシヨが出来たって小耳に挟んで、何か面白くない気分になってるルウシエル…》

ルウは真つ赤になって眉を吊り上げたが、氣力を振り絞って化粧板をフウリに示した。フウリの覗き込む板には、小さなルウが映っていた。

《…私だってもうちよっと待っててくれれば、フウリみたいに艶っぽくなるのに…》

さすがに耐え切れなくなつて、ルウは化粧板を伏せた。

「凶悪だな、こいつ…。フウリ、元凶はこの人形だ。おっさん

は知らない」

「……？」

「そ、それじゃあ蒼の里の長様が、私の素性を知りたくて、シリィにこれを持たせたっていうの？」

一通り説明を聞いたフウリは、呆然とした。

「おっさんは煽(あお)られるのが嫌で、里であんたの事、何にも言わないんだ。けど、ノスリ長はそういうの、放っとけないヒトだから…。あのヒトにとって、おっさんはいつまでも子供なんだ」

フウリは下を向いて息を吐き出した。

「もし、ナーガ様の部落で、そんな…、そんな、話になつちゃっているのなら…」

ルウは口を閉じて、黙ってフウリを見ている。

「私は風露の民なの。この谷で二胡を作つて生涯暮らすって、決まっているの」

「別に？ それで良いじゃないか。あんたがどこの暮らしでどうもおっさんがあんたを思つのをやめる理由にはならない」

ケロリと言つルウに、フウリは困つた顔で微笑んだ。

「ルウにはまだ分からないわね。夫婦(めおと)ってというのは、周囲に祝福されて一緒にならなくては。共に暮らして、支え合

って、家庭を作って、子供を育てて、…そうやって部族の未来を紡いで行くの」

「私の両親は共に暮らしていないぞ」

「え？」

「母者は西風の長だし、父者(うてじゃ)は砂の民の次期総領だ。」

どっちかに片寄って暮らす訳に行かない」

「……………」

「でもちゃんと支え合って未来を紡いでいるぞ。お互い、それぞれの部落でやるべき仕事をやって。んで、父者がたまに来て、三人でご飯食べて、色んな事教えてくれて、肩車されて、ぶん

ぶん振り回されて、早く寝なさいって言われて」

「…それは…、ルウのご両親が特別なよ。お互い部落にとって大事なヒトだから。仕方なくだわ」

「仕方なく？ フウリ、それは違う！」

ルウは思わず大きな声になり、慌てて声を落とす。

「父者も母者もお互いを尊敬している。長としてしっかりと生きているお互いが好きなんだ。だから、一番良い形なんだ」

「……………(めんなさい)……………」

シムンとするフウリに、ルウは慌てて言い直した。

「いや、すまない…。ヒトに自分の考えを押し付けられるなんて、いつも父者に言われているのに…」

「素敵なお父様だわ」

「うん、いつも別れ際、母者を頼むって言うんだ。だから、私は早く一人前になって…、早く立派に長になって…、母者がもっと父者の側に居られるように…」

「……………」

思わぬ事まで口走ってしまって、ルウは鼻の下をこすりながら話を戻した。

「おっさんの両親だって一緒に暮らしてはいなかったんだぞ」

「そうなの？」

「おっさんの母者に会った事がある。巫女みたいな立場で、守るべき場所からあまり離れられないらしい。すんごい遠い場所だって。ここと蒼の里の間なんか比べ物にならない位」

「…まあ…」

「だから、おっさんにとって、あんたが部落から出られないとか、あんま関係ないと思う」

「……………」

「まあ、ここまではおっさんの気持ちだけだ。そっちはどうなんだ？」

「ぶえっ?!」

フウリはしゃっくりみたくな声を出した。

「い、いきなりそんな事…」

「他に好きな奴、いるのか？」

「い…、いえ…」

「じゃあ、これからどう転ぶか分かんないだろ。住む所がどうとかいう理由だけで、スタートラインにすら立ってやんないんじゃない、おっさん可哀想過ぎぬぞ」

「……………」

「今ん所、好きか嫌いかというと、どっち寄りなんだ？」

「そ、そりゃ…勿論、嫌いではない…わ…」

「それで充分だ。これからも楽器を教えてやってくれ」

「……………」

「それから、今、ひしゃげたカエルみたくなってる。何とかしてやってくれ」
フウリはマジマジとオレンジの瞳の娘を見た。

「何だ？」

「ルウって本当に子供なの？ もしかして、見かけだけ？」

「こないだ十になった。十って風露の部落では子供か？」

「子供だわ」

「西風の里でも子供だ」

二人は何となく顔を見合わせて、笑った。

閨の番人の若者は、途方に暮れていた。

オレンジの瞳の女の子に、物凄く強引にフウリの居場所を言わされ、ツタ滑り用の棒を引ったくられた。老師やオルグ長に知られたら大目玉だ。

「でも……………」

小屋の隅でどよんと折れススキみたいになっているこのヒトを見たら、あの娘がこの事態を何とかしようと頑張っているのは分かる。掟敵しい部族だが、皆が皆、頭が堅い訳ではなかった。

「あのお…、坊っちゃん、無事で良かったですねえ」

当たり障りのない声を掛けてみた。

「…は…ああ…はい……………ご迷惑をお掛けして…」

「迷惑だなんて思っていないです。子供が大事なのは誰でも一緒です」

「…いえ…。僕は名ばかりの親です。本当の親だったら、この子に全神経を注いでいただろう」

蒼の妖精は、隣で所在無さげに座る羽根の子供の頭を撫でた。
「すまなかったな。もうお前の他に大切なモノを作らないよ」

「あのお…」

番人はソロリと口を挟んだ。

「子供はそういうの、喜ばないですよ。子供は大人に幸せになつて欲しいんです。でないと自分も幸せになれませんから」

ナーガは顔を上げて若者を見た。

「あ、勿論、僕等は見識が狭い。風露の部落ではそうだって事です」

「西風の里でもそうだぞ！」

戸口が開いて、ルウがフウリを伴って現れた。

「おっさんが自分の幸せを閉ざしたって、その分他所よそに幸せが聞く訳じゃないからな。逆だ。一個の幸せが枯れたら、他の幸せもみんなしぼむんだ」

それから番人とシンリイを小屋から引っ張り出し、代わりにフウリを中に押し込んだ。

「ちゃんと仲直り出来るまで小屋から出ちゃ駄目だ。頑張れ」
ナーガにその声を掛け、外から扉を閉めた。やれやれ、手間の掛かるおっさんだ。

額に思いっきり縦線の入ったナーガに、フウリは恐る恐る声を掛けた。

「ルウに話は聞きました。ブローチは何でもなかったのに…、
「ごめんなさい」

ナーガは下を向いて黙っていたが、決心したように外へ飛び出し、すぐ戻って来た。その手には不気味人形が握られていた。

「…?!」

「あ、貴方に、恥をかかせてしまいましたっ、すみません。僕も、お、同じ目に遭いますっ」

一息にそう言うと、人形の目を見据えてから机に置いて、震える手でさっきのブローチをかざした。

「貴方がいいって言うまで、このブローチは降ろしませんっ」
あまりに一方的で自虐的な償いに、フウリは啞然としたが、止めようとはしなかった。月明かりがクリスタルに小さいナーガを映す。

《・・ナーガ・ラクシャ、蒼の里に住んでる。次期長のプレッシュャーで、いつもへコミがちな、ナーガ・ラクシャ・・》

いきなりな暴露に、ナーガは動揺したが、頑張ってブローチをかざし続けた。

《・・いつもいつも、失うのを恐れている。ユーフイ、父上、自分を育ててくれた平和な里…。失ったモノを想うほどにどれだけ苦しい思いをするか…。もうこれ以上失いたくない・・》

ナーガは小刻みに震えた。何を言ひ出すんだ、この人形は…。
《・・最初から何も持たねば失わずに済む。僕は…ヒトもモノも、好きになりたくなかった・・》

赤いを通り越して蒼白になるナーガを、フウリは紫の瞳を

しはたかせて、じっと見つめる。

《・・谷に落ちたシンリイを探している時、怖かった。シンリイがいなくなったら、僕はどんな気持ちになるだろう？・・》

「もう…許して下さい…」

ナーガは小さい声で言った。

「駄目です」

フウリは毅然と言った。

《・・失ってホツとするんじゃないか？ 持ち続ける不安より、とっとと失ってしまいたい自分がある・・》

愕然とした。これは間違いなく自分の心の奥底から出た言葉なのだ。

フウリは目の奥を揺らしながら口をキュッと結ぶ。まだ終わらせちゃいけない…。

《・・でも、でも…、ルウがシンリイを背負って現れた時・・》
「……嬉しかった」

《・・嬉しかった・・》

現実のナーガと、幻影のナーガが同時に喋った。俯うつむいた頭に、近寄ったフウリの体温を感じた。プローチを持つ冷えた手を、暖かい両手が包む。

「…もう、いいですよ……」

「もう少し、休まれて行けば宜しいのに…」

梯子の手前でフウリが心配そうに言う。

「いえ、明日も早い仕事があるのです。ルウ達も修練所に行かなきゃ」

ナーガは目をそらして事務的に答えた。

醜態を曝し過ぎて、一周回って頭が冷えた。仲直りはしたが、あまりにも気まず過ぎる。フウリは、さっきの出来事以来、目を合わそうともしてくれない。

ラウ老師に命じられた『罰』のカンテラ磨きを済ませた子供二人が、小屋から駆けて来た。シンリイは手に元凶の不気味人形をしっかりと抱えている。

そうか、あの人形…、言葉を使わないシンリイの心を知るのに役立つんじゃないか？ と、ナーガが思い付いたタイミングで、シンリイが転んだ。

「あっ…!!」

そんなに強い衝撃を加えた訳でもないのに、打ち所が悪かったのか人形は縦にキレイに割れた。

「あーあ…」

ルウがシンリイを助け起こして、割れた人形のカケラを見下

ろした。

「真つ二つだ。でも、潮時だったんじゃないか？ こいつ、凶悪過ぎた。なあ、おっさん」

「あ、ああ…そうだな…」

ナーガはちょっと残念そうにカケラを眺めた。結局、一番ヒドイ目に遭ったのは、自分だったような気がする…。そして、持ち込んだ本人は、のほほんと…、あれ？

隣で、フウリが身をそらせて、後退りしている。シンリィがいつの間にかそこに来て、割れた人形のカケラを拾って、フウリに向けて差し出しているのだ。

「え…え…?!」

戸惑う風露の娘を、澄んだはなだ色の瞳が見上げる。

「受け取ってやってくれ。そんなカケラじゃ、もう『映し身人形』の機能は果たさないだろう」

ルウに言われて、フウリは恐る恐る手を伸ばして木切れを受け取った。手にした瞬間、職人としてのフウリが、その木切れの行き先を知る。

「…ナーガ様」

「は、は…」

「二胡を、置いて行って下さる？」

「え？ あ…、でも…」

最悪の事態を感じてナーガは蒼くなった。

「作り替えた所があるんです。来週来られるまでに仕上げておきますから」

「え？…って？ 僕、来週も来ていいんですか?!」

「当たり前でしょう。まさかもう曲をマスターしたつもりなんですか？」

ナーガは一生懸命首を横にブンブン振った。振り過ぎてクラクラした。

「その木切れ、どうすんだ？」

楽しそうに聞かせるルウに、フウリもニコリ笑って答えた。

「ナーガ様の二胡の弦を支えるコマに使います」

「えっ？」

「これから、この二胡は、貴方の正直な心の音色を奏でる事になるでしょう。綺麗な音が出せるよう、一緒に頑張ってくださいませ」

展開が急過ぎて着いて行けないナーガは、このフウリの言った言葉の一つ一つを、翌日の夜くらいにやっと呑み込めて、いきなり踊り出して、ノスリとホルズを驚かせるのだった。

くおしまい



〜余話〜

霧深い風露の谷。
.....

落ちたシンリィを追って、ルウは崖を下っていた。さっきから足首のアンクレットがシャンシャンと鳴って、一つ方向を指しているのだ。

大岩を越えて視界が広がると、遠くの棚に、水色の長い髪が見えた。

「お師さん!!シンリィ!!」

岩の上に座った水色の妖精の膝には、羽根の子供が横たわっていた。しかし背中を丸めたまま動かない。

「シンリィ……! 怪我したのか?!」

「大丈夫……」

水色の妖精は静かに口を開いた。

「気絶しているだけだ。さすがに怖かったみたいだな」

「ごめん、こんな目に遭わせちゃまって」

「いや、手を離れたのはこの馬鹿だ」

……見ていたのか。

「お師さんがシンリィを助けてくれたのか?」

「ん……いや……、ボクは受け止めただけ。助けたのは羽根だ」

ルウはかがんで、ボサボサの羽根を見つめた。

「凄いな、羽根。普段は邪魔そうだけれど」

「……そうだな、でも考え物だ。なまじ羽根が護ってくれるもんで、この子は、現実の危険と付き合う力が育たないんだ」

水色の妖精はいつになく深刻な表情で、シンリィの頬に掛かる後れ毛を払っている。

「羽根は万全じゃない。過ぎた力を使うと散って失せてしまつ小さく波打っている羽根は、岩に擦った所が傷んでささくれている。

「そうだったら『巢落ちの雛鳥』だ。自分を守る術もなく、すぐイタチに捕られちまう」

水色の妖精は溜め息着いた。

「それが心配で、ついつい何度も助け上げて巢に返しちまう。

それやってくるから、いつまでも翔べないんだよなあ……」

もう後れ毛は払い終わっているのに、彼は何度も子供の頬を撫でていた。

パンと音がして、頭の上の空間に何かぶつかって、空気を揺らした。

「ナーガもまだまだだな。地力はボクよりあるのに……」

水色の妖精は無表情な声になり、自分の作った結界の天井を

見上げた。

「ルウシエル、動揺は術の力を半減させる。覚えておけ」

「…はい」

ルウモ上を見た。ナーガがシンリイを必死で探す術の力が、結界に弾かれてキラキラ飛んで行く。

ルウはシンリイを受け取って背負った。確かに雛鳥みたいに心許なく軽い。

「じゃ、お師さん、また」

「ああ…、あ、これ…」

水色の妖精は足元に置いていた不気味人形をルウに渡した。

「何でこの人形をシンリイが持っているんだ？」

「お師さん、知っているのか？ この人形」

「まったく、ノスリのボンクラが!!」

水色の妖精は、シンリイが人形を持たされた経緯を聞いて、鼻から息を吐いて腕組みした。

「以前、家庭内争議を引き起こしてエライ事になったのをすっかり忘れてるな。この『映し身人形』は強力過ぎる。映した相手の心の奥底の、一番隠しておきたい部分を真っ先に喋るんだ。凶悪だぞ。自分でも気付いていない深層心理を、ヘラヘラ、

ヘラヘラ」

「ど、どうすりゃいい？ お師さん」

「どうもどうも、シンリイはノスリに言われた事をきっちり守りたいんだろう」

「大丈夫なのか？」

「知らん、まあ、人死にが出るような事態にはならんだろ」

「………」

「役割が終わったら処分するんだ。ヒトガタだから、慎重にな」
「どうすりゃいい？」

「…うん…、そうだな…」

水色の妖精は、ルウの背中でクウクウ眠っているシンリイを見た。

「こいつに出来るだろう。任せておけば……おっと」

水色の妖精の視線を辿って振り向くと、遠くにフウリ達が見えた。視線を戻すと、彼はもういなかった。

「お師さん…、お師さんは、シンリイの…？」

↳ t o b e n e x t ↵